

同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

令和4年度（2022年度）は藤井が化学科長及び化学専攻長を務め、学科委員の瀧宮和男教授とともに化学教室および化学専攻の運営に当たりました。

化学専攻の兼担で多元物質科学研究所所属の火原彰秀教授が東京工業大学へ異動するために令和4年度末に退職されました。その他にも多くの方が着任・異動されました。同年度に採用、昇任、異動、退職された方々は以下の通りです（なお、福村知昭教授の配置換は本務が東北大学材料科学高等研究所から理学研究科化学専攻に戻られたことによります）。

教授 福村 知昭 4月1日付配置換（無機固体化学）  
准教授 佐々木 茂 4月1日付昇任（学際基盤化学）  
助教 伊藤 優志 4月1日付採用（生命分子ダイナミクス）  
助教 千葉 秀平 4月1日付採用（生物化学）  
助教 豊田 良順 4月1日付採用（錯体化学）  
助教 玄 大雄 4月1日付採用（ナノ・マイクロ計測化学）  
助教 脇坂 聖憲 4月1日付異動 学際科学フロンティア研究所へ  
助教 小野寺 恒信 4月1日付異動 本学工学研究科へ  
助教 Debbarma Suvankar 4月25日付採用（有機分析化学）  
准教授 高坂 亘 6月1日付昇任（錯体物性化学）  
助教 平野 智倫 8月1日付昇任（計算分子科学）  
助教 奥津 賢一 令和4年8月31日付退職  
助教 河内 元希 9月1日付採用（有機分析化学）  
助教 Tomar Deepak 9月22日付採用（有機物理化学）  
助教 岡 大地 9月30日付退職  
助教 Gupta Shraddha 10月1日付採用（錯体化学）  
助教 Debbarma Suvankar 11月30日付退職  
講師 加藤 信樹 12月31日付退職  
助教 Wang Xiaoling 令和5年1月1日付採用（有機分析化学）  
准教授 松井 敏高 令和5年3月31日付退職  
助教 西嶋 政樹 令和5年3月31日付退職  
助教 寺内 毅 令和5年3月31日付退職

令和4年度は新型コロナ禍からの緩やかな回復過程の1年間となりました。流行ウイルス

のデルタ型からオミクロン型への移行に伴い、極度の緊張感は大幅に緩和されましたが、同時に学内感染者数は社会と同じく激増し、感染拡大防止と日常生活取り戻しの間のバランスを慎重に探り続けることを余儀なくされました。結果として、スポーツ大会や学位記授与式、卒業祝賀会などの対面が必須の行事は復活がまだ果たせませんでした。4月の新入学オリエンテーション、7月のオープンキャンパス、8月の保護者交流会、そして学位審査などは種々の制限を行いつつも対面式で行われ、伝統の野副杯も再開しました。またそれ以上に講義の大半がハイブリット形式を含む対面式に戻り、特に学部学生の生活はこれまでの日常が大きく回復しました。加えて、オンライン講義期間にインターネットを用いた様々な学習支援システムの利用が一般化し、対面式講義の様相もコロナ以前とは相当に異なるものとなっています。年度後期には海外を含む学会参加のための出張も一般化し、学生の留学も徐々に再開すると共に、海外研究者の来訪状況もコロナ前に戻っていきました。研究活動においても、コロナ禍からの着実な回復を実感出来る1年となりました。

また、化学教室に関わる東北大学の大きな動きとして、理学研究科を含む7大学院研究科の化学及び関連研究分野の教員を組織した新たな大学院プログラムである東北大学統合化学国際共同大学院（GP-Chem）がスタートし、令和4年4月に修士2年次の学生を第1期生として迎えました（既存大学院との同時履修になります）。本プログラムの運営には化学教室の教員が中心的な役割を担っており、林雄二郎教授がプログラム長を務められています。化学系サマースクールも GP-Chem の事業として継続することとなり、本年度はオンライン形式で8月18－19日に開催されました。本プログラムの発足により、より国際的かつ広い視野をもった若手化学研究者の育成が進むものと期待されます。

以上、化学教室の近況をご報告申し上げます。コロナ禍からの完全回復を期す次年度以降も化学教室の発展に向け、構成員一丸となって邁進していく所存ですので、引き続き同窓会の皆様のご協力とご支援を賜りますと幸いに存じます。

末筆ながら、皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

令和5年7月31日